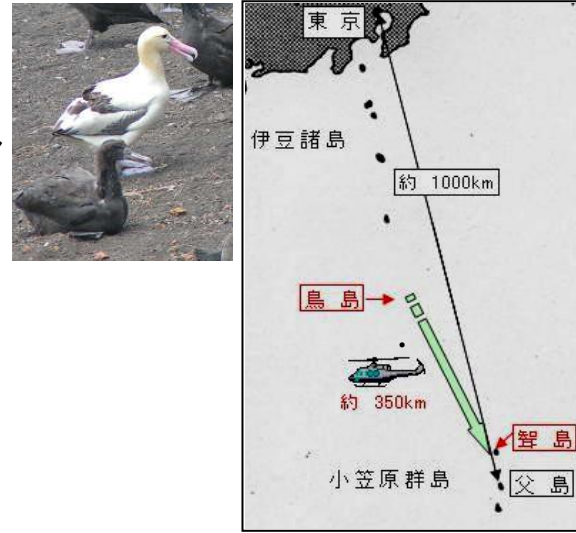


人により激減し、その後回復した野生生物 ～アホウドリの事例～

- アホウドリはかつて伊豆諸島及び小笠原諸島以西の島嶼で多数繁殖していたが、羽毛採取のために大量に乱獲され、一時は絶滅したと考えられていた。
- その後、わずかな個体が生き残っていることが確認され、保護の結果、現在までに順調に回復している。



■生物学的特性

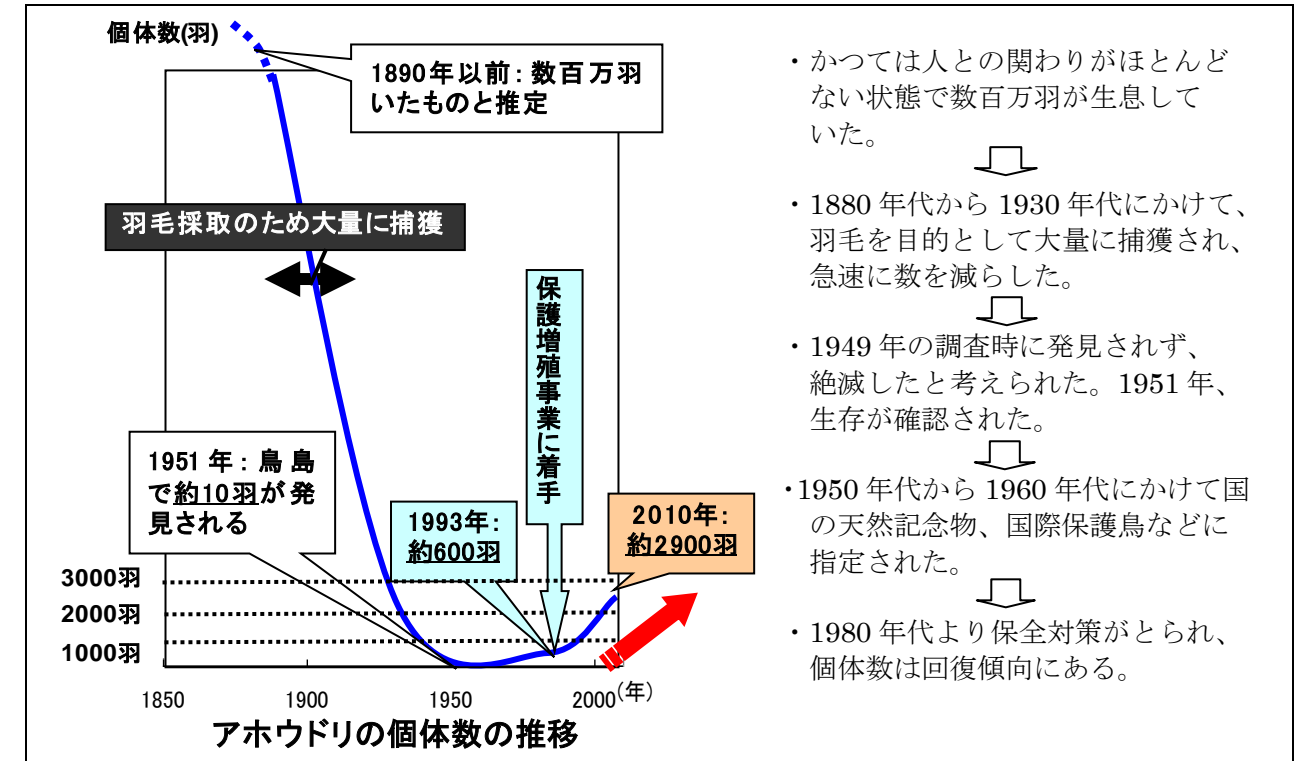
- ・ ミズナギドリ目アホウドリ科
- ・ 鳥島、尖閣列島のみで繁殖
- ・ 繁殖期に島に渡来し、非繁殖期にはベーリング海、アラスカ沖などに移動。

■アホウドリ関連年表

年	アホウドリに係る主な出来事	アホウドリに係る法制度
1887年	玉置半右衛門らが鳥島に上陸し、開拓に着手	
1888年	鳥島で本格的に羽毛の採取を開始	
1902年	鳥島で火山が大噴火	
1919年		狩猟鳥獣に指定
1932年12月～ 1933年3月	禁猟区指定前に、駆け込みで約3,000羽が捕獲される	
1933年4月		保護のため鳥島が禁猟区に指定(10年間)
1936年		小笠原諸島聳島列島が「アホウドリ類の繁殖地」として禁猟区に指定(10年間)
1939年	鳥島が噴火、噴出物がコロニーに堆積	
1947年		狩猟法施行規則の一部改正により、捕獲禁止
1949年	オースチン博士が「アホウドリ絶滅」を学術雑誌に発表	
1951年	鳥島で約10羽が生残・繁殖していることを再発見	
1958年		国の天然記念物に指定
1960年		国際保護鳥に指定
1962年		国の特別天然記念物に格上げ
1965年		鳥島がアホウドリの繁殖地として天然記念物に指定
1985年	鳥島で51羽の雛が巣立つ	
1993年		種の保存法により国内希少野生動物種に指定／アホウドリ保護増殖事業計画を策定／従来コロニーの保全管理と新コロニー形成の推進を決定
1995～1996年	新コロニーで最初の卵が生まれ、この雛が成長し巣立つ	
2006年		アホウドリ保護増殖事業計画を変更(聳島新繁殖地形成事業を追加)
2007年	鳥島から10羽の雛が聳島に運ばれる	
2009年	推定2,300羽程度が生息	
2011年	聳島で巣立った雛の帰還が確認される	

出典：東邦大学メディアネットセンター「アホウドリ復活への軌跡」(長谷川博)及び環境省資料より作成

■鳥島におけるアホウドリの個体数



- ・ かつては人との関わりがほとんどない状態で数百万羽が生息していた。
- ・ 1880年代から1930年代にかけて、羽毛を目的として大量に捕獲され、急速に数を減らした。
- ・ 1949年の調査時に発見されず、絶滅したと考えられた。1951年、生存が確認された。
- ・ 1950年代から1960年代にかけて国の天然記念物、国際保護鳥などに指定された。
- ・ 1980年代より保全対策がとられ、個体数は回復傾向にある。

出典：環境省資料

■保全の概要

アホウドリの大部分が繁殖する鳥島は約100年間で3回の噴火を起こしている火山島
→ 噴火による生息地の破壊が懸念され、生息地を分散させてリスクを低減することが必要

◆鳥島における従来のコロニーの保全

- ・ 営巣地への泥流の流入により卵や雛が押し流される事故が多発
- 繁殖成功率を高めるため、植栽や土留工などによる繁殖地の環境改善事業を1981年に開始。

◆鳥島における新たなコロニーの形成

- ・ 繁殖期の火山噴火による繁殖集団の壊滅が懸念
- 島内のより緩傾斜の場所に新たなコロニーを形成(1992年からのデコイの設置・音声再生など)
- 鳥島北西斜面では1995年に最初の一つが産卵、その後増加し、2011年には56羽の雛が巣立った。

◆小笠原諸島聳島における新たなコロニーの形成

- ・ 非火山島での新繁殖地の形成が課題
- 鳥島から南南東約350kmの場所にある聳島はかつてアホウドリの繁殖地であった。アホウドリは自分が巣立った島に戻って繁殖することから、ここに雛を移送して人工飼育。
- これまでに雛55羽を移送して、全て巣立つ。
 - 2008年 雛10羽を移送
 - 2009年 雛15羽を移送
 - 2010年 雛15羽を移送
 - 2011年 雛15羽を移送
- 数年後、成熟したアホウドリが聳島に帰還して繁殖を開始することが期待されている。



鳥島から聳島に移送されたアホウドリの雛

出典：東邦大学メディアネットセンター「アホウドリ復活への軌跡」(長谷川博)及び環境省資料より作成